

パレスチナ風のパノラマ素描、彩色なし！

－ 歴史、政治の概観 －

エルファン・アルジョフマニー

はじめに

これはパレスチナの歴史から引用した連続の絵である。絵筆を使わず、ペンでかいた。この研究のどの絵も描かれるのに立派な画家が要るはずだ。ピカソは1937年にスペイン内乱とそれに伴う悲惨への怒りをこめて描いた反戦的大作ゲルニカを書いた。しかし今日のパレスチナの中にはゲルニカに劣らず悲劇的な絵が何百もある。

この研究では、パレスチナが、世界にとってどんな重要性を持っているのか、発表したい。

世界中の放送局を観察すると、パレスチナという言葉は毎日何百回も出てくるのがわかる。なぜかという、まず第一に、キリスト教の揺籃の地というわけだ。預言者イエスは2000年前にパレスチナのベツレヘムで生まれて、それからその聖地からキリスト教がパレスチナを超えて諸国に伝播した。さらに、パレスチナは昔から様々な国民にとって重要な交通路なのだった。世界中で今迄続いている占領はイスラエルの占領しかないのだ。運命のいたずらで潔白な国民は犠牲になり、絞首刑執行人は裁判官となる。読者は次の一つ一つの絵を読み切ったら、黒っぽいのか、真っ赤っぽいのか、それとも夜明けのように輝かしいのか、その絵はどんな色なのか、自分で考えるべきだ。

さていくつかの絵をお見せしたい。



1) パレスチナ

上の地図を見ると、パレスチナは西アジアの地中海南東岸の地方で、聖書に見える物語の舞台である。パレスチナという地域はイスラムとキリストとユダヤ教徒にとって重要な聖地である。パレスチナにはエルサレムや預言者イエスが生まれたベツレヘムや彼が幼年以来30年間を過ごしたナザレやアラブとユダヤ人の父祖のアブラハムの墓があるヘブロンなどのとても聖なる地がある。パレスチナという国家はそれほど大きくなくて、面積はおおよそ2万7千平方キロメートルである。パレスチナは古代オリエント諸国の侵入や争奪の地で、ローマ、ビザンティン、ペルシア諸王朝の支配を受けたが、ローマの支配が一番長くて、紀元前の63年から636年まで続いた。636年にはムスレムのアラブがローマからパレスチナを解放すると同時にキリスト教会やユダヤの聖なる場所を守っていった。ムスレムは1099年までパレスチナの平和や治安を維持して、みんなも平穏な生活を送った。

2) 十字軍

前の絵から450年後、西欧諸国がイスラム教徒を討伐するために11世紀末から13世紀後半に至るまで9回にわたって行った遠征だった。あの時、十字架の旗の下の西欧諸国の連合軍の集合場所はエルサレムの城壁前だった。エルサレムの守備隊は4万人のアラブ人だった。十字軍との大規模な戦闘が起きた。5週間の後、金曜日1099年7月15に、十字軍は激しい勢いで

平和の町の周壁に突進し、恐るべき血なまぐさい人間大虐殺をした。さらに三日間にわたって、エルサレムを略奪して荒らした。濃い黒い煙や血の海や遺体などの混ざった悪臭が町の空気に広がってしまった。それだけではなくアラブ人のすべての捕虜が殺され、ユダヤの神殿やシナゴークも破壊された。その日から、エルサレムは十字王国の首都になった。その状態は88年間続いていた。しかし子供遠征（1212年）はその9つの遠征のなかで一番不思議な遠征だった。その遠征は本当に同情を誘うしかない。なぜかという、子供遠征では何千人もの子供がパレスチナに向かう途中、船主が子供たちを奴隷とし、売買してしまったからだ。

この長時間の戦争は西欧とイスラム世界の間に幅広い問題を残した。

3) エルサレム解放

この絵では、サラディン（エジプトのアイユーブ朝の始祖）が1187年10月2日支配されたエルサレムを奪回し、十字軍を滅ぼしたことが描かれてある。しかしサラディンは十字軍とはきわめて対照的に、捕虜を殺さなかつただけでなく、貧乏な人や老人たちをかいほうしたのだ。さらに教会やキリストにとって聖なるものを守って、キリスト教徒のエルサレム巡礼も許した。ヨーロッパの歴史家も自分自身でサラフ アッディーンの高潔を認めている。このシーンと前のシーンとは全然違うだろう。

4) パレスチナにおけるイギリス

パレスチナはオスマン帝国におおよそ400年間統治された。しかしオスマン統治が終わってすぐ、1917年にイギリスが入ってしまった。第一次世界大戦の結果として1923年に英国の委任統治領とされた。ところで、イギリスはパレスチナの将来で重要な役割を果たした。それはいわば人類の歴史の中で、他国の将来にそのような危ない役割を果たした国はないとも言えるだろう。第一次大戦中の1917年11月2日に英国外相バルフォアがパレスチナにユダヤ民族国家建設を認めることを約束したという宣言をした。一方では、アラブは、バルフォア宣言がパレスチナにどんな危険をかけるのかを知り、ユダヤと多くの犠牲者を払った連続の戦争が始まろうとしていた。そのため、イギリスが仲裁をして、バルフォア宣言は、約束されたパレスチナ独立や自治や解放などという権利に影響を与えるものではないとして、アラブを安心させた。しかし裏面では、イギリスが事実を偽って、パレスチナをだました。第一次世界大戦後に、イギリスは世界のユダヤ人がパレスチナへ流入するのを許しただけでなく、ユダヤ移民がパレスチナに居住するように経済的、また政治的に支持した。その陰險な陰謀のせいで、ほとんどのパレスチナ人が生き別れになって、殺されてしまったパレスチナ人も多数に上る。南にあるガザからシリアの北のアレッポにいたる地域に今だ点在するパレスチナ難民キャンプは、パレスチナに対して犯されたひどい罪の証明だろうか。その間にシオニズム（パレスチナにユダヤ人国家を建設しようとする運動）が数えきれない大虐殺や犯罪を犯した。ここでそのうちの一つについて話したいと思う。

1948年4月9日にデールヤシーンという田舎に、地獄という言葉では弱すぎて言い表せな

い虐殺が起きた。その呪わしい日にイルサレム周辺にあるデールヤシーンの279人の住民が全滅させられた。殺された人々はほとんど無邪気な子供や潔白な老人と女性だった。最初の虐殺ではなかった。ヤーファア、ハイファ、アッラムラなどでそのような卑劣な非人道的犯罪が犯された。総数500村が破壊されて、その村の土地やオレンジ農場も入植者に分配された。それから破壊された田舎の瓦礫の上にイスラエルの植民地が建てられてしまった。

そのような虐殺はパレスチナ人の間に恐怖を蔓延させるのが目的だった。だから、たくさんのパレスチナ人が世界中へ命からがら逃げた。パレスチナ人の女の人が次のストーリーを語った。『8歳だった。ユダヤ人は突然私の家に手榴弾を投げて、全ての窓がガチャンと粉々に割れてしまった。私と弟が本当に怖くて、恐怖の叫び声をあげた。散弾銃で家のドアが取り外された。三人のユダヤ人で、二人の男の人と女の人と分かった。間もなく侵入者がわたしの祖父の襟を引っ張りベッドから中庭に引きずり出してすぐパンパンという銃声が聞こえた。祖母が慌てて中庭に駆けつけたが、手遅れだった。その後、伯父の家に行くことにした。行く途中で見知らぬ人と出会った。その人は分からない言葉を大きい声で言って、祖母の頭に銃を突きつけ、躊躇なく発砲した。祖母はウマルという名前の弟を抱いたままで倒れてしまった。何秒かすぎたあとで祖母を起こしてみたが何の反応もなかった。私は気が狂ったようにウマルと叫んだが、弟も死んでしまった。

その虐殺のあとで犯罪の証拠を隠すために、ユダヤ人が殺された人の遺体を燃やすことにした。イスラエルシテルン暴力団のある幹部は『道で油だるを3本30遺体に注いで、火をつけた。しかし30分が経っても、死体は完全に燃えきらなかった。未だ忘られない肉の焦げる臭いが僕の鼻に残っている』とその忌まわしい思い出について話した。ところで、デールヤシーン虐殺同日にアラゴン暴力団のマナヒームベージェン隊長(後でイスラエル首相になった)は『おめでとう、デールヤシーン虐殺が大偉業』と高慢に断言した。

5) イスラエル建設宣言

ワシントン時間で1948年5月14日6時に本格的にイギリスがパレスチナから撤退した。同日の6時1分にイスラエルという国家が宣言された。6時11分にアメリカ合衆国はイスラエル国家を認めた。つまり、たった10分後だった。そしてイスラエルはパレスチナの80%を支配するようになった。さらに、ユダヤ人は150万人のパレスチナ人を本国から追放してしまった。いわば、国際社会の顔にいつまでも泥を塗る悲劇だった。それで終りではなかった。1967年6月にイスラエルは残った20%のパレスチナを支配しきったのだ。そのため、第二回目のパレスチナ移住が起こった。数万人もヨルダンや様々な国に脱出したのだ。すなわち、地理的なパレスチナは完全にイスラエルの手中に入った。

6) 現在のパレスチナの人口総計図

現在、パレスチナは地理的に二つの地域から成っている。一つは1948年に建設されたイスラエルを含んでいる地域である。面積は2万平方キロメートルである。もう一つは東にある西川

岸地区と西にあるガザという地帯である。めんせきは7千平方キロメートルぐらいである。今日、パレスティナに住んでいるのは1050万の人口であり、2つの主な所で暮らしている。ガザ地帯とヨルダン川西岸地区に400万人居る。そして、1948年からイスラエル国内に暮らし続けてきた120万人のパレスチナ人、と530万人のイスラエル人である。つまり、簡単な計算で520万人のパレスチナ人に対して、530万人のイスラエル人になる。しかし、パレスティナ国外に難民として600万人のパレスチナ人が居る。パレスチナ人は故郷を取り上げられただけではない。家族も一緒に暮らすことができなくなってしまった。急いで避難しなければならなかったことや、そのときの大混乱のために、生き別れになった人も多く出た。だからパレスチナ人の家族や親戚は世界の様々な国に散らばって住んでいるのが普通のことになった。パレスチナ人は次の所に生き別れた。

- 1) ヨルダンには100万人（ヨルダンの人口の50%）。
- 2) シリアには50万人（3%）
- 3) レバノンには40万人（13%）
- 4) アラブ半島諸国には100万人。
- 5) 世界中には150万人。

イスラエルの人口総計をじっくり考えてみると次のことを理解できる。パレスチナ人の人口はイスラエルの存在を危険をさらすので、昔からイスラエル政府は常にイスラエルからパレスティナ人を追放して、ヨーロッパのユダヤ人を移住させている。1990年～1993年まで、ロシアからパレスチナに50万人のユダヤ人が移住された。そのため、イスラエルの人口は10%ぐらい増えていた。今も2010年～2020年の間に100万人ユダヤ人を移住させる計画がある。パレスティナ国民にかけている毎日の経済封鎖や土地没収などの様々な圧力というのは、パレスティナが完全にユダヤ化されるという陰謀があると信じる十分な根拠だろう。だから、あまねく知られた事実のように、イスラエルは、国連の決議のパレスティナ難民の帰国を含む民族的権利の行使を認めないのである。

7) ハマス選挙勝利

1月25日に行われた第2回パレスチナ評議会選挙は、東エルサレムでの選挙活動への妨害（ハマスの候補者を認めない、他の候補者の拘束）などがありながらも、投票率74%で「民主的」に行われた。

その結果、132議席のうち、ハマス（イスラーム抵抗運動）が過半数に近い74議席を占め、独立系の関係当選者を合わせると80議席となり、ファタハの43議席を大きく上回った。比例区では大きな差はなかったものの、選挙区ではほとんどの場所でハマスの圧勝。この結果は国際社会にも激震を起こした。

パレスチナ自治政府評議会選挙におけるハマスの勝利に、誰もが「これからどうなるんだ」と口にする。それにたいする答え、そして、選挙の結果が良かったのか悪かったのか、その判断は誰がその疑問を差し挟んでいるのかによって大きく左右される。

ハマスの勝利は予想されてはいたが、勝利の規模は、広く言われるように、「衝撃的」だ。ハマスの劇的な勝因はいくつかあげられるが、パレスチナ運動において何十年も支配的な立場にあり、傲慢にも、自らを議論の余地のない正統な指導者とみなすようになったファタハの腐敗、シニシズム、戦略の欠如に対して有権者が幻滅を抱き、嫌気がさしていたこともそのひとつだ。

しかし、選挙の結果はまったくの驚きではなく、最近の出来事がすでに暗示していた。たとえばヨルダン川西岸地区北部のカルキリヤ市だ。イスラエルの入植植民地に取り囲まれていたが、コンクリート製の隔離壁の包囲が完成し、カルキリアの5万人の住民はイスラエルが管理する巨大なスラムの囚人にされてしまった。

カルキリヤの市議会は長い間ファタハの牙城だったが、壁の完成後、昨年行われた市議会選挙で有権者はすべての議席をハマスの手に渡した。この「カルキリヤ効果」が今や占領地全域に波及し、伝えられるところによれば、ハマスは選挙区から選ばれる議席を実質的に独占したようだ。だから、ハマスの勝利は、屈服を強要するイスラエルの努力に対するパレスチナ人の抵抗の決意の表明であり、ファタハに対する不信任なのだ。ハマスの勝利は紛争の原点をあぶり出す。それは占領があり、抵抗があるということだ。

占領下のパレスチナ人にとって、ハマスの勝利がどんな意味をもつか、まだはっきりしない。選挙の結果に基づき、パレスチナ「政府」が組閣される、というように、まるでパレスチナがすでに独立した主権国家であるかのように扱うことが現在では広く行われている。

しかし、政府の最低の義務が国民の生命、自由、財産を保護することにあるならば、パレスチナ自治政府はこれまで、とうてい政府と呼べるような代物ではなかった。自治政府は誕生した時から、イスラエル軍が自分達の町や難民キャンプのまん中で行う日常茶飯な殺傷からパレスチナ人を守れなかったし、入植者の植民地として押収される土地を1ドゥナムさえ守れなかったし、過去10年、イスラエルが根こそぎにした100万本以上の木の苗木ひとつすら守ることはできなかった。

むしろ、パレスチナ自治政府は、パレスチナの抵抗を押しつぶし、占領地域におけるイスラエルの植民地化を恒久化し、安全にするというイスラエルのコンセプトによって作られたのだ。ハマスは自治政府がそんな形で続くことを許さないことは確かだが、自治政府をイスラエルに対する抵抗運動の一部に変換することができるかどうか、それは定かではない。ハマスはイスラエルに対する一方的な休戦をこの1年間守ってきたが、イスラエル側が真に休戦に合意するなら、それを継続する意志を示している。強い立場に立つハマスは、明らかにそのような申し込みが可能だと信じており、戦術的にも全面的な武装抵抗を再開する時期や方法をはっきりしないでおくほうが有利なことを知っている。

ファタハの影響下にあるパレスチナ自治政府の治安部隊のなかには、ハマスが率いる政府に従おうとしないものがあるかもしれない。自治政府の中に残る構造が崩壊し、民兵組織に分割されることも予想される。選挙の結果を尊重しないと公言するイスラエルやアメリカは、そのような内部対立を助長することに興味を示すかもしれない。イスラエルは、ハマスの勝利を口実に、これまで以上の抑圧をおこない、西岸地区ではできるだけ多くの土地にできるだけパレスチナ人人

口を少なくする土地収奪を目的とする壁の建設、入植植民地の建設に拍車がかかるだろう。そんな展開になれば、イスラエルとパレスチナのあいだで暴力的な紛争が劇的にエスカレートする危険性がある。

パレスチナ人の多数は離散し難民や亡命者として暮らしているが、これらの人は紛争解決へのプロセスから次第に除外され、取り残されてきた。イラク人について、アメリカとその同盟国は、国連の援助のもとで、「国外の有権者」が選挙に参加できるよう驚異的な努力をしたにも関わらず、パレスチナ難民に声を与えることには関心を示さなかった。パレスチナ難民のほとんどは、ファタハがイスラエルとの和平交渉の過程で自分たち難民の〔帰還の〕権利を売り払うだろうと思っており、ファタハには、こういう人たちの参政を強く要求する動機はなかった。難民が人口の90パーセントを占めるガザで誕生したハマスが、これらの国外離散者の懸念に明瞭にこたえる政策をとりあげるのかどうか、それはまだわからない。

「国際社会」——と言っても、たいていの場合、それは米国、欧州連合、ロシアとコフィ・アナン国連事務総長のカルテット（四者）のことを指す——にとって、選挙結果は大誤算だった。カルテット、そして、カルテットの知的なたわ言のほとんどを生み出す資金豊富なNGOやシンクタンクの一群は、イスラエルの占領を終結させるのではなく、パレスチナ人を「更生する」ことで紛争を解決しようとするアプローチを築き上げてきた。

これらの勢力は名目上ニ国家制による解決を約束しながら、イスラエルにたいしては土地の没収や植民地の拡大を止めるように圧力をかけるでもなく、その一方で、ファタハ率いるパレスチナ自治政府を終りのないゲームに引きずり込み、パレスチナ人は自分たちが基本的人権を与えられるに相応しいことを証明するためになんでもやらなければならないようにしむけた。この和平交渉産業は昨夏、イスラエルがガザから8000人の入植者を撤退させた時、その戦術に歓呼の声をあげ、イスラエルが西岸地区にこれまで以上の数の入植者を送り込み、実質的にニ国家制による解決を不可能にしていることについては沈黙した。

このゲームの主な目的は、公正で長続きする平和をもたらすことではなく、カルテットは地域にとっても世界にとっても絶えることのない懸念的である紛争の解決に何もしていない、という嫌疑に対し予防線を張っておくことだけだ。このカルテットが真の平和を目指すなら、イスラエルに面と向かい、責任のある行動をとらせることができるが、それをやるだけの政治的な意志に欠けている。

ファタハがこのゲームにおいて、囚人であると同時に不可欠なパートナーであり、共犯者であったことはまったく疑いがない。そうでなければ、なぜ、アメリカはここ数ヶ月のあいだにいくつものプロジェクトに何百万ドルも使い、票を金で買うようなことまでして、必死にファタハを支えようとしたのか？また、なぜ、欧州連合は、パレスチナ人がハマ스에投票するならば援助を止めると脅迫したのだろうか？ほとんどのパレスチナ人は、交渉に次ぐ交渉、何億ドルもの対外援助にもかかわらず、これまでにない規模の土地が収奪され、自分たちが以前にもまして貧しくなり、自由でなくなったことを身をもって知っている。この手の贈収賄と恐喝がパレスチナ人にはまったくきかず、むしろ、逆効果になり、ハマス支持を増やしたのだと言えそうだ。

ハマスの勝利は、紛争の責任をイスラエルの植民地化からパレスチナ内部の病理にそらそうとする企みを根底から覆すものだ。しかし、和平交渉産業は簡単にはあきらめず、今度はハマスに向け「責任のある」行動をとれ、立場を「やわらげろ」と呼び掛ける。それはすべての抵抗をやめ、これまでファタハによって演じられてきたおとなしい共犯者の役を引き受けろということにほかならない。

アメリカはすぐに「イスラエルの承認」をハマスに突き付けたが、それは時計の針を 25 年戻すようなものだ。当時、PLO を無視して和平交渉から閉め出すための口実として、まったく同じ要求が使われた。しかし、ハマスが見てきたように、PLO はこれらの要求をすべて飲んだのに、イスラエルの占領はすこしも緩まず、アメリカのイスラエル支援も少しも減っていない。ハマスがアメリカの要求を飲むことはまずなさそうで、もし仮にハマスが飲んだとしても、それは多分、占領により悪化する現場の状況に応える新しい抵抗グループを生み出すだけだろう。

あとがき

「よく“パレスチナ問題”というとないていの人は、難しいことのように思われる。なるべくなら避けたいと言うのが、私には多くの日本人の本音のように感じられる。

なるほど、確かにそれは言えるだろう。とくに最近日本のメディアでは、アラブの民衆抵抗運動をどれも「テロリズム」の言葉で一括りにしている。新聞やテレビのニュースなどでは、真実を伝えていないと思う。イラクでそうだったが、パレスチナ問題もアラブ地域の情報というものに、日本のマスメディア各社は自由な言論・報道を失っている。それは単に、「日本の報道はアラブ情報に弱い」というだけの理由ではない。実際に問題の当事者であるイスラエルやアメリカなど、「国家の圧力・政治の権力に弱い」という側面を持っている。これは外国のメディアから見たら理解しがたい。欧米のメディアでは、少なくとも報道は支配者側に対して中立から批判的である。情報に対して日本のようなフィルターのかかけ方では、支配者側の宣伝機関に過ぎなくなり、「公共広告」と何ら変わらなくなってしまう。

例えば、パレスチナの抵抗闘争というなかで自爆攻撃というものが語られたけど、日本でも戦時中は神風攻撃というある意味人間を武器として戦うような異常とも言える体当たり攻撃が行なわれてしまったわけだ。しかし、このように若者たちをいくら占領に対する抵抗とは言え、自爆などの攻撃に駆り立てるものはいったい何なのかということを知りたいと思う。「人間を武器にするのではないか」という見方それ自体が、パレスチナの抵抗闘争を見た場合に間違った解釈だと思う。彼らは、何かに強制されてとか、「やりたくないのにやらされる」というのではない。もう完全に孤立した状態のなかで、他に頼るものもなく、抵抗の手段がなくなって、「やむを得ず」あのような攻撃に出てしまうのだ。確かに、パレスチナの人々は、イスラエル軍のような戦車もヘリもジェット機も持ち得ないで抵抗するしかない。「オスロ合意」以前や中東戦争時のように周辺アラブ諸国の軍隊がパレスチナ解放闘争に立ち上がってくれるような状況ではなくなってしまった。そのような時に、ついにパレスチナ人たちは、自分たち独力で解放闘争を闘うことになったのだ。しかし、すでにパレスチナの外で戦っていた解放組織は力を失ってしまい、抵

抗運動の主体はパレスチナ国内に留まっている民衆の手に委ねられていた。そこにインティファードが起こり、パレスチナで民衆の抵抗運動の真っ先に立ってパレスチナの子どもたちは、手に石を持ってイスラエル軍の戦車の前に立ち抵抗したのだ。そもそも、このインティファードとは、この石を投げて闘う子どもたちから始まったものだ。そういう子どもたちは、兵隊に石を投げることによって自分が銃で撃たれる危険性が非常に高くなる。学校に通いながら石を投げるし、家に帰りながらも石を投げる。その日の学校に行く前に自分が銃で撃たれて、もしかしたら死ぬかも知れない。それでも石を投げる。子どもたちは自分の抵抗の意思表示のために石を投げ始めたのだ。そこから今度は、若者たちが自分たちでも危険を顧みないで抵抗することを考え始める。子どもたちに危険な抵抗をさせるくらいなら、大人が黙っていたのではいけないと思いはじめたのだ。大人たちは自分の大切な命よりも、もっと大切な大勢の同胞の未来を考え、より早くイスラエル軍を撤退に追い込むための手段として自爆という自己犠牲の闘いを始めてしまったのだ。このような闘い方は、何もパレスチナ・アラブ地域だけのことではない。民族が違うからとか、宗教問題とか、そういうこと以前の問題としてある。抑圧された人間が自らの尊厳を守り抜くための最後の一线を死守する闘いだと思う。

むしろ、私たちが批判していくのは自爆する人たちではなくて、近代兵器を駆使して安全な地域にしながらボタンひとつで民間人をミサイルで殺すことが出来る人たち。そういう命令をする人たちを批判するべきだ と思う。このようなことを許している社会に住んでいる私たちは、自分でも無意識のうちに抑圧された民衆を「自爆をさせている」同じ私たちがいることを自覚するべきだと思う。

パレスチナでも広島、長崎はよく知られている。原爆を発明したのはユダヤ人であり、日本に投下したのはアメリカのトルーマン大統領。トルーマンといえば、シオニストに荷担しイスラエルを見事に独立させたわけで、そのときからアメリカはイスラエルの味方をしてきた。日本とパレスチナの敵は、アメリカとイスラエルである。「さあパレスチナと日本が手を結びアメリカとイスラエルをやっつけよう」と本気で語っているパレスチナも多い。

世界全体がその問題の後始末に心を砕いてきた。しかし60年を経っても事態はまだ変わらない。というよりも、悪化の途をたどってきた、とさえいえる。押せども突けども、動かぬ現実。私は中東のシリア人として、パレスチナ問題について、また中東和平について、発言してきた。それは中東の平和を希求してであるが、同時にこの人類的課題に対する日本社会のあり方、あるいは私自身の生き方や考え方をたしかめ直すためでもあった。

参考図書

『アッサウラー新聞』(アラビア語)、2006年5月17日付、シリア、ダマスカス。

『アラビア百科事典』(アラビア語)、1959年、エジプト、カイロ、アッシュャブ出版社、p. 1310。

『アルアラビージャーナル』(アラビア語)、2001年9月号、クウェート、p. 96。

『アルファイサルジャーナル』(アラビア語)、1979年2月号、サウジアラビア、p. 45。

『アルムナデルジャーナル』(アラビア語) 2003年4月号、pp. 65-75。

『ディラーサート・ファラスティニッヤー・ジャーナル』(アラビア語) 1999年69号、p. 96。

アフマド・タラビーン編『パレスチナ問題』(アラビア語)、第2巻、ダマスカス出版社、1968年、p. 963。

板垣雄三編『石の叫び耳を澄ます』(日本語)、1992年7月10日、平凡社。